日本リスクマネジメント学会
ソーシャル・リスクマネジメント学会

合同関東部会を開催

藤江氏が定年退官記念講演

日本リスクマネジメント学会とソーシャル・リスクマネジメント学会は6月17日、専修大学神田校舎で合同関東部会を開催した。ソーシャル・リスクマネジメント学会の研究報告に加え、日本リスクマネジメント学会の特別企画として、前千葉商科大学教授の藤江俊彦氏による定年退官記念講演や、昨年1月に亡くなった亀井利明名誉理事長の追悼書に関する出版記念ディスカッションなどが行われた。当日は学会会員などが参加した。

亀井リスクマネジメント論について議論

藤江氏

部会の冒頭、上田和勇専修大学教授があいさつし「本日は、南は鹿児島や山口の下関から、北は東北から参加いただき、大変感謝している。半日にわたる合同部会が有意義なものになればと思っている」と述べた。

研究報告では、下関市立大学教授の森幸弘氏が「中小事業者のリスクマネジメントと商品先物市場」をテーマに、大阪産業大学の渡邉容子氏が「近時の判例傾向からみるハラスメントに関するリスク」をテーマにそれぞれ発表。森氏は、世界の取引所に比べて日本では低調な商品デリバティブ取引について、中小事業者による利用拡大に向けた課題を探った。渡邉氏は、社会的に顕在化している「ハラスメント」の現状を、職場におけるパワーハラスメントを中心に把握するとともに、近時の判例傾向から直面する問題点と今後の課題を考察した。

休憩を挟んで行われた記念企画ではまず、藤江氏が「組織不祥事における対応の失策について」と題して講演し、近年に起きた行政や企業の不祥事を分析しながら、対応の失敗の本質を考察した。

「リスクマネジメントの本質」でディスカッションも

行政の不祥事については、加計学園問題や不用意発言に端を発した大臣の辞任など中央官庁に関わるものや、教育委員会による「いじめ事件」否認報告、県議会議員の政務活動費詐欺といった地方自治体関連の事件などを紹介した。事後の不適切な対応が問題を大きくさせたものが多い中、適切に対応した事例として、福岡市JR博多駅前道路陥没事件を取り上げ、「福岡市長のネットやSNSを活用した迅速で分かりやすい情報告知・開示や、役所内各部門での相互連絡と一体感のある対応は他の自治体にも参考になる」と評価した。

一方、企業の不祥事については、東芝不正会計・巨額損失問題を取り上げた。時系列で問題の発生から現在までを概観してから、失敗のポイントとして、①トップリーダーの戦略的失敗（ウェスチングハウス社買収）②トップリーダーの戦術的失策（会計不正）③トップリーダーの個人的野心（対立・虚飾）④院政型リーダーシップ（相談役・顧問）⑤国策企業的勘違い（政府・経済産業省）⑥社員軽視の風土（意見遮断）⑦内部統制の欺瞞（ぎまん）（社外取締役等）―の7点を指摘した。

後半は、亀井名誉理事長の主要図書を体系化し、章ごとに補筆してまとめた追悼書「リスクマネジメントの本質」の出版記念ディスカッションを実施。編著者である上田氏をはじめ、関西大学教授の亀井克之氏、森氏、放送大学教授の奈良由美子氏、日新火災の亀井弘明氏、元白鴎大学教授の戸出正夫氏、東北福祉大学教授の江尻行男氏の7人が補筆を担当した各パートの概要や感想などを述べてから、亀井名誉理事長のリスクマネジメント論について議論した。

上田氏は、同書を編集した経緯について「亀井先生が逝去された後、いくつか主要図書を読み直したところ、現代の企業やビジネスパーソンにとって非常に重要な論点について体系化して研究していることに気付き、後世の人に伝える必要があると考え、各先生に補筆を依頼させていただいた結果、今回の本が完成した」と述べた。

第2章「リスクの意義・形態・本質」などを担当した亀井氏は「現在、リスクについての書籍がたくさん出版されており、どれも役に立つが、英国やフランスの書籍を踏まえて書かれた本は意外と少ない中、亀井先生は原理原則に基づき、海外の先行研究をしっかり踏まえて執筆されていた」と指摘。また、第3章「リスク処理手段の選択」を担当した森氏は「亀井先生は早くから、保険だけに依存したリスクマネジメントは不十分であり、多様なリスク処理手段の効率的な活用が不可欠になると強調しており、リスクコントロールとリスクファイナンスの二つの区分について非常に分かりやすく解説している」と説明した。

第8章「家庭危機管理」を担当した奈良氏は「この章の最も大きなポイントは、リスクマネジメント理論の汎用性。リスクマネジメント論は企業経営を中心に生成・発展した一方で、かなり汎用化できるものであり、亀井先生はリスクを抱える家庭にもリスクマネジメントの考え方を応用することは有効だということを示した」と解説した。

亀井弘明氏は、担当した第10章「ソーシャル・リスクマネジメントの展開」について「保険会社で働いている立場からすると、ソーシャル・リスクという新しい概念をうまく定義付けているとの印象を受けたとともに、保険について学問と実務がうまくマッチしていた」と評した。また、第12章「鬼怒川の氾濫にみるソフト・コントロールの重要性」を補筆した戸出氏は「亀井先生は、リスク感性の豊かさが非常に大事だと始終言っていたが、最近では、早くから避難警報が出ていたにもかかわらず多くの地域住民が自力で避難できなかった鬼怒川の氾濫の事例が、リスク感性の重要性をよく表している」との考えを示した。第13章「介護をめぐるソーシャル・リスクマネジメント」を担当した江尻氏は「2000年に導入された介護保険制度について、亀井先生は当初から非常に詳しく研究しており、庶民の味方的な発想で書かれているところは、非常に勉強になった」と振り返った。

部会の最後に事務局から、今年開かれる第41回全国大会の開催地が東北福祉大学になったと紹介された。